30　　和歌に詠まれた人々のおもい 　　　　　 和歌の修辞

Ａ　あしびきの　山鳥の尾の　しだり尾の　ながながし夜を　ひとりかも寝む

（柿本人麻呂）

Ｂ　みかの原　わきて流るる　いづみ川　いつ見きとてか　Ⅰ恋しかるらむ

（中納言兼輔）

Ｃ　山里は　冬ぞさびしさ　まさりける　人目も草も　かれａぬと思へば

（源宗于朝臣）

Ｄ　花の色は　うつりにけりな　いたづらに　わが身世にふる　ながめせしまに

（小野小町）

Ｅ　契りきな　かたみに袖を　しぼりつつ　末の松山　波越さじとは

（清原元輔）

Ｆ　滝の音は　絶えてⅡ久しく　なりぬれど　名こそ流れて　なほ聞こえｂけれ

（大納言公任）

【本文チェック】

①□ａ・ｂの助動詞の、文法的意味・文中での活用形を書きなさい。

　ａ（　　　　　・　　　　　形）　　ｂ（　　　　　・　　　　　形）

②傍線部Ⅰ・Ⅱを現代語訳し、書きなさい。

　Ⅰ（　　　　　　　　　　　　　　　）

　Ⅱ（　　　　　　　　　　　　　　　）

③Ｃ・Ｄの歌の句切れの部分に ｜ を書き入れなさい。

　Ｃ　山里は　冬ぞさびしさ　まさりける　人目も草も　かれぬと思へば

　Ｄ　花の色は　うつりにけりな　いたづらに　わが身世にふる　ながめせしまに

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の読みを、現代仮名遣いで答えよ。

１　朝臣〔３〕（　　　　　　）

２　袖〔５〕（　　　　　　）

問２　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。

１　かる〔３〕　（枯る）（　　　　　　　　　　）

　　　　　　　　（離る）（　　　　　　　　　　）

２　うつる〔４〕　①移動する

　　　　　　　　　②（　　　　　　　　　　　）

　　　　　　　　　③変化する

　　　　　　　　　④花や葉が散る

３　ながめ〔４〕（眺め）　①（　　　　　　　　　　　）

　　　　　　　　　　　　 ②眺望

　　　　　　　 （長雨）（　　　　　　　　　　　　）

問３　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　心憂きものは世なりけり。（堤中納言物語）

　ア　親子の関係　　イ　男女の関係

　ウ　兄弟の関係　　エ　上下の関係

　（　　　）

２　御さまをやつし給へども、なほ世の常の人にはまがふべくもなし。

（源平盛衰記）

　ア　とても　　イ　ますます

　ウ　やはり　　エ　そのまま

　（　　　）

【文法力 ✚】

問４　次の説明にあてはまる和歌の修辞の種類を答えよ。

１　同音を利用して、一つの言葉に二つ以上の意味をもたせる。

（　　　　　　　）

２　和歌のうえで、一定の言葉の前に習慣的におく通常五音の修飾語。

（　　　　　　　）

３　和歌のうえで、中心となる語句の部分へつなぐ前置きとなる、通常七音以上の部分。二句以上にわたることもある。

（　　　　　　　）

４　歌の中心的な主題をより強調するため、ある一つの語と縁の深い言葉を使って、歌に味わいをつける表現。

（　　　　　　　）

５　一首の和歌が、意味のうえで何句目かでいったん切れること。

（　　　　　　　）

問５　次の和歌に使われている修辞技法を問４の答えから四つ答えよ。

きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ（古今和歌集）

（　　　　　　　）（　　　　　　　）（　　　　　　　）（　　　　　　　）

【古典常識】

問６　『小倉百人一首』は、主に鎌倉時代初期に活躍した歌人・藤原定家が選んだ秀歌撰である。定家の父は勅撰和歌集『千載和歌集』の撰者として知られる藤原だが、定家自身もその次の勅撰和歌集『新古今和歌集』の撰者である。平安時代初期の『古今和歌集』以下、鎌倉時代初期の『新古今和歌集』までの八つの勅撰和歌集を「八代集」という。

　　　「八代集」に含まれないものを次から一つ選べ。

ア　和歌集　　イ　和歌集　　ウ　後拾遺和歌集

エ　和歌集　　オ　和歌集　　カ　和歌集

　（　　　）

【解答】

【本文チェック】

①　ａ＝完了・終止　ｂ＝詠嘆・已然

②　Ⅰ＝恋しいのだろうか

　　Ⅱ＝長い年月がたって（久しくなって）しまったけれども

③　Ｃ＝山里は　冬ぞさびしさ　まさりける ｜ 人目も草も　かれぬと思へば

　　Ｄ＝花の色は　うつりにけりな ｜ いたづらに

　　　　わが身世にふる　ながめせしまに

問１　１＝あそん　２＝そで

問２　１＝（枯る）枯れる　（離る）とだえる

　　　２＝色あせる

　　　３＝（眺め）もの思い　（長雨）長く降り続く雨

問３　１＝イ　２＝ウ

問４　１＝掛詞　２＝枕詞　３＝序詞

　　　４＝縁語　５＝句切れ

問５　掛詞・枕詞・序詞・縁語　（順不同）

問６　エ

【現代語訳】

問３　１　つらいものは男女の関係であるなあ。

　　　２　（殿は）お姿を目立たない格好になさっても、やはり世間の普通の人と間違えられるはずもない。

問５　着続けて身になじんだ唐衣のように、長年なれ親しんだ妻が都にいるので、（その妻を残したまま）都を離れ、はるばる来た旅のわびしさを身にしみて思うことだ。